

利光横

私の作家研究

双樹社

昭和二十二年八月一日・印刷
昭和二十二年八月五日・發行

一利光橫

「橫光利一」

定價 四拾圓

著 者

古 谷 綱 武

發 行 者

東京都中央区日本橋茅場町二ノ一四
飯 野 知 彰

印 刷 者

東京都西多摩郡國村根ヶ布三八五
牧 恒 夫

發 行 所

本 社
大坂市東住吉區航全町七四七
雙 樹 社
電話天王寺(77)三二八一番
東京支社
東京都中央区日本橋茅場町
二丁目十四大興ビル内
會員番號A二一九一二三番
〔印刷・製本 株式會社 大化堂〕

増補新版の序

「横光利一」の初版がでたのは、昭和十一年、私の二十九歳のときであつた。文藝評論の道にこころざした私の處女著作である。そのときから、すでに十年の歳月をこえようとしてゐる。この著作が、いまだに讀者にむかへられて生命をもちつづけてゐるといふことは、まことに著者として光榮なことである。私にとつてもこれは、青春の記念といつてよいものだとおもつてゐる。

卷末の二篇、「横光利一と農民」「利一、康成、義秀」は、日本の敗戦ののち、昭和二十一年の秋と二十二年の初春に書いたものである。

昭和二十二年三月

著 者

増補新版の序

横光利一・目次

増補新版の序	著者	一
風貌について		三
構成について		一八
對蹠について		二九
環境について		三五
位置について		三九
人物について		四八
可否について		五四
孤獨について		五八
探求について		五九

思考について	七
文學について	七
小説について	八
人間について	九
祈願について	一〇
關係について	一〇
文章について	一〇
性格について	一五
横光利一と農民	二〇
利一、康成、義秀	二五
「書方草紙」とその頃のこと(跋)	二六
高野三郎	二六

橫
光
利
一

風貌について

尤もらしい顔といふものがある。かういふ顔の顔面筋肉の運動には、情熱の消費を示すやうな表情といふものは、全くない。感情を計量しながら、消費してゐるのかと思はれるほどに、生活の平衡を失ふことがない。私は、その肯定的な顔貌が人生への無關心以外を語つてゐると思はれない。かかるひとびとは生活の多彩な變化を空想することはあつても、肉體に根ざした祈願をもつことはないであらう。かくのごとき輕快な善良さは、私にかぎり味氣なさや退屈を囁ませる。

尤もらしい顔といふものは、例外なく尤もらしい言葉に終始する。それにはいかに人生の普遍的眞理を語つてゐやうとも、否、語つてゐればゐるほど、私の肉體には欠伸以外の變化は起

らないのだ。情熱に裏附けられてゐない言葉は機能をもたぬ。言葉のもつ光彩と陰影と色調は、その発見のために削られた血肉のもの以外のものではない。そして、肉血をもつて獲得された言葉以外にひとをうつ言葉といふものはない。尤もらしい言葉は、それが尤もらしければ尤もらしいだけ虚偽である。合理的な響を與へるためにのみ存在してゐる言葉は、すでにみづからの役目を終つてゐる。まづ否定から始まらねばならぬ。たとへ再び最初と同一の地點へたちもどるにしても、それは變化である。反抗のない享受は決して藝術家のものではない。求むべきはむしろ惡魔である。信仰よりは誠實である。

最近、私にもつとも敬愛のころを深く感じさせた誠實の書に「書方草紙」一卷がある。私はこの横光利一氏の血戰の記録から尤もらしい言葉をきくことはできなかった。しかし私がそこに觀たものは、實に生々しい惡魔の誠實である。

名言名句の眩惑に酔ふために勉強する者は、この一卷から、なんら學ぶところがないのであらう。唯獨自な個性の歩いた足跡を貪る者にのみ、この一卷は與へられたのである。横光氏の眞摯な眼は焼印のやうに、私のところに刻まれた。一二のひとびとによつて、述べられたやう

に、この一卷はまことに「福音書」であり、「枕頭の書」である。一讀するだけならやめた方がよい。ただ、常に愛讀するひとにとつてのみ、必要な一卷である。

感傷的に趣味を語つたり、怠惰な文藝談に耽つたりしてゐる世の多くの隨筆集は別としても、深く印象に残つてゐるものに、谷崎潤一郎氏の「饒舌錄」、佐藤春夫氏の「退屈讀本」、齋藤茂吉氏の「念珠集」などがある。是等の隨筆集から受けた或る一面の印象、たとへば壯麗な味、輕妙な味、枯淡な味などといふやうな、觀賞的な愛着心に比べて、「書方草紙」一卷が與へる心銘は、もつと根本的に相違したものである。前記の隨筆集は、しみじみとした愛情をもつて讀みつづけられるのに反して、「書方草紙」は終始、常に人を壓する。ここには「向ふも見ずに、ただひたすらに精神の危機を狙つて押し進まうと企畫した」横光氏の「およそ十五年間の紆餘曲折した脱皮生活の斷片的記錄」が、幾分グロテスクな愛嬌を帯びてその悲調を奏でてゐる。まことに「書方草紙」の一卷は「今日悲劇といふ名を冠し得る唯一の作者」が捨て去つた脱殻の堆積であり、われわれが噛みしめて乗り越えるべき生きた足跡である。

風貌について

われわれは、この不可思議な光りを放つ書物には「たしかにしたたか酩酊」するであらう。「神出鬼没な方法をもつて悩ます」この倫理書に對して「もう良い。あれはああいふ一人の男だと漸く思へるやうに」なれるまでは、つきまとはれて手離し得ない書物である。われわれをこの書物への酩酊から救ひだすものは、横光利一對マルクス、横光利一對ヴァレリーのそのやうに、この書物に對して「不逞極まる血戰」を挑むこと以外には斷然ない。私は今「書方草紙」一卷に對する私の愛情のなかに、敵意の潜んでゐるのを除くことは不可能である。敵意を捨てた瞬間に、私のところには絶望が巢喰ふであらう。「われわれは（氏の）言葉に默從してゐる子であつたとしたならば、悲しむべきものはわれわれでなくて誰でもない。なぜなら、それは苦痛だからだ。苦痛を増せば増すほど子は苦痛を與へる母を蹴上げて逃げる。」私はそれを憐れた先輩に對する禮儀であり、義務であると思得る。しかし、こんな感慨は、言葉の上で多分に概念的な色調を帯びるばかりでなく、嫌に氣障な甘つたれにきこえるだけだ。私は默しよう。ただ、次のことだけはいひたい。

中途半端な批評心を起して、この書物を読むものにとつては、この書物がかかるひとの望む

ままのひつかかりを與へる。しかし、かくのごときひとに對しては、この書物はなんの感銘も與へないであらう。ただ、ここを空しくしてひもとくものにのみ、この書物の扉は天道にひられるであらう。

前に述べた谷崎潤一郎氏や齋藤茂吉氏の隨筆——もちろん、兩氏の隨筆の味ひは確然と相違してゐるが——は整つた均勢のある格調を踏んでゐる。自然な生理的必然を辿つて展けてゆく。それに比べて「書方草紙」は、妙に不均勢な變調子である。いたるところに急直な曲り角があつて、生な實感が傷いたしく露出してゐる。たとへば、佐藤春夫氏の隨筆集において、用ひられてゐる「藝術家」といふ言葉は美しいだけに、かならず逃げ道がひそませてある。それに比べて横光氏の用ひてゐる「藝術家」といふ言葉は、讀む私に面映ゆく感じさせるほどまでに、融通の利かぬ野性的な生眞面目さのなかに、嚴然と背水の陣を張つてゐるのだ。私は「藝術家」といふ言葉を、このやうな心意氣をもつて、用ひた現代作家は葛西善藏を除いては、外に知らない。

このやうな實感の傷いたし露出から、私はのしかかつてくる奇蹟の重量を感じるのである。そして、ここからこの書物の獨自な眩暈をうけたことを白狀しなければならぬ。それらの言葉に籠められた實感の激しさは、私の論理的な批判心を封じて、たゞ胸を射るのである。「書方草紙」の實質は、それが一途にわれわれの情熱に訴へるところにあると信じる。この書物は明瞭に肉體の書だ。

「書方草紙」のなかで、横光氏はいつも論理的な相貌をもつて、文章を辿つてゐるのではあるが、こんな身勝手な論理といふものはあるものではない。概念的な意味での論理といふものはこの書物には斷じて見出すことはできない。だが、それだけに恐ろしい書物であるといふことを痛切にひたいのだ。藝術の世界においては、かかる相貌は常に傑れた誠實な思索が残した偶然な奇形であつた。そしてしかも、それは決して作家の目指した目的ではなく、よき資質がおのづから示した結果にすぎなかつたといふことは、更に重要なことである。しかしこんな生意氣なことはいはなくてもいい。ただ、ひとびとが、この書物から求むべきものは、かかる奇形の相貌では斷じてない。むしろ氏の肉體のなかにひそんでゐるその原因を見ねばならぬ。

論理といふものは、決して、それに攻撃されるものところを本質的に問ませない。しかも論争といふものは、お互にお互を問ませたと信じさせがちなものだ。愚劣な論争と反駁が、お互に相手の論旨に勝手な誤解を加へて、壮烈たる表情をしてゐるのはまことに不潔な感じを與へる。

また、たとへ論理に問まされるやうな場合があるにしても、それが論理であるかぎり、その凹みどころが、自分で明瞭に解るものだ。ただただ、恐ろしいのは、かういふ實感のなまなましい激しさで胸を射る言葉である。それは殆んどつかみどころのないほどにまで、擴大された、容積をもつて重壓してくる。

この書物のなかには、何かいひたいために、あるひは話をそこまでもつてゆくために引用したといふやうな、間ののびた情動的な文章が殆んど、否、全くない。どの一行を拾つてみても背後に直接な眼の光りが凝視してゐる。しかも、いちど凝視をうけると逃げ場を失つてしまふやうな凝視だ。たとへば、「大養健」といふ章の次の如き一節に出會つたとき、私は氏の凝視

に、こいつはたまらねえなあといったやうな、さむざむとしたものが、身内を吹きすぎるのを感じないわけにはゆかなかつた。「しかし彼はときどき時計を出す。彼の時計は時間を計るのだ。ここから想像すると、恐ろしく彼の過去の生活に於て倦怠を感じたことのないことを匂はしてゐる。」

この一節から氏の文章にひそむひとつの獨自な眼を探しだすといふより、直接に感じる事ができる。時計といふものが、氏の語らんと欲することを證據だてる例となつてゐるのではなく、時計から上げた直感を、文章の態をなすために必要な最少限度の長さにのばしてゐるのである。

ひとびとはひとつの想念を文章にする場合、かならず、その想念をいじくつて、いろいろな枝葉、推理でひきのばすやうな遊戲に耽りがちだ。そして、この時間の経過のなかにその想念は奇異の迫力を減じて、普遍的な均勢が加はるものではあるが、それと同時に、その想念には屹度、嘘が加はる。すでに加はつた嘘は自分でも見分けがつかず、如何とも爲しがたいものである。

だが、かかる事情とは凡そ反對な位置にある「書方草紙」におけるがごとき文章は、夢を描いてもつとも現實的な端正さを生むものである。自分の述べんと欲することの例證として、時計を引用するならば、もはや單なる説明と墮する無力な幾行かを書かねばならぬ。しかし、それとは凡そ遠いこのぬきさしならぬ、しやつちよこばつた思考形式のあらはれから強烈な迫力を感じるのだ。そして、その不均勢のなかに、氏の激しいモラリテイの火華を見逃すことができない。

「書方草紙」一卷に漲つてゐる不協和音には、どこか滑稽な感じがある——私にはかういふ以外に、それをどう説明してよいかわからぬ。いきなりかういふとあまり飛躍してしまふのだが、私の言葉の意味を解つてくれるであらうか。私は説明できぬ——是が私には横光氏の風貌のなかで重要なものに見える。なぜなら、そのなかに氏の獨自な體臭があるから。「書方草紙」が、私を激しく引きつけるもつとも大きな理由は、ひとつ此處にある。それは、どんな瑣末事をも直ちに生活の中軸に結びつけて語るからではない。單に、東京一流の理髪店で直ちに藝術の本質に思ひ到つてしまつたときの、氏の氣むづかしさうな顔つきをいつてゐるのではないの